

あまたの先日 ひしめいて今日

なつやすみの美術館⑩
MOMAW Summer Museum Project 10
2020.7.11(土) - 8.30(日)
The Museum of Modern Art, Wakayama
和歌山県立近代美術館

A Lot of Other Days Loaded in Today 出品目録

出品作品をおよその展示順に掲載しています。個人蔵以外は和歌山県立近代美術館蔵です。
作者名(欧文生歿年)、作品名、制作年、技法・材質、寸法(縦×横×奥行 cm)、寄贈作品の
場合は寄贈者名を記載しています。
各作品に添えられた文章は、田中秀介さんによる作品に対するコメントです。

・展示室では鉛筆をつかってください
・かべなどにもたれないでください
・フラッシュ撮影はできません

1 睨み にらみ

一番身に近い距離を指します。
暮らしに馴染み、自身に関与していることさえ忘れて
しまっている物事を、改めて注視する態度です。

1. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



いっけんひそう
一見秘蔵
2018(平成30)
油彩、キャンバス 31.0×25.0cm
個人蔵

普段使っている物であれ、秘蔵としている物であれ、しまい方一つでどっちがどうと見分けがつかない。

4. 森口 宏一 (MORIGUCHI Hirokazu / 1930-2011)



ひょうめん びん
表面・壺
1976(昭和51) ブロンズ、クロームめっき
12.0×65.0×65.0cm
森口まどか氏寄贈

まず、触りたい。次に口に含みたいと思った。しかし、飲んでもいいよ。と言われても、結局お断りするだろう。反射する、液体だか個体だか分からぬ物はきっと体に良くない。

2. 三木 富雄 (MIKI Tomio / 1938-1978)



みみ
耳
1965(昭和40)頃
アルミニウム 70.0×42.5×12.5cm
所明義氏寄贈

この耳は硬い。本来の耳は柔らかい。矢継ぎ早に耳に触れ硬さを確認すると、形容しがたい硬さである。皆、同じ様な硬さなのだろうか。

5. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



はい
つつい配す
2019(令和元)
油彩、キャンバス 20.0×22.0cm
個人蔵

やれ、ほかそう。やれ、直そう。やれ、剥がそう。つつい忘れ。気がつけば、全てそこに配していた。

3. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



すんぜん われ
寸前に我なし
2020(令和2)
油彩、キャンバス 67.0×60.0cm
個人蔵

酒を手にする寸前に、酒の事を考えていただろうか。何かを成そうとする時、その目的に近づく程、目的に対する意識が遠のく。

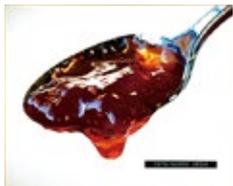
6. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



あま
余りなじみ
2018(平成30)
油彩、キャンバス 72.0×60.0cm
個人蔵

この余りものは、友の字に見える。幼なじみの彼を思い出し、じっと絹さやの味噌和えを見つめていた。

7. 上田 薫 (UEDA Kaoru / 1928-)



すぶーん じゃむ
スプーンのジャム B
1975(昭和50)
油彩、キャンバス 181.9×227.3cm

作者はこのとろみが好物であり、食べるといづれ無くなるので描き留めたのだろうか。その思惑であれば、私は煮こごりと捉えよう。

8. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



こ
2017(平成29)
油彩、キャンバス 130.0×162.0cm
個人蔵

焼き鯖を食べます。切り身の中心に箸を入れ、上下に身を分けます。この分けた状態と対峙した時、鯖が霞み、「こ」がせり出ます。束の間「こ」となった。

9. ヴォーコス, ピーター (VOULKOS, Peter/1924-2002)



せらみっく すたっく
セラミック・スタック
1982(昭和57)
陶 109.4×55.2×54.3cm

壺なのかこれは。そもそも壺とは何だ。もはやこれが壺かそうで無いかはどうでも良い。いや、これを壺だとすると、そこらじゅう壺まみれである。

10. 保田 春彦 (YASUDA Haruhiko / 1930-2018)



いぬ どうこつ
[犬の頭骨]
1950(昭和25)
セメント 22.0×51.8×24.7cm
作者寄贈

化石を掘り当てたなら、あら、化石!となるかもしれない。同じ地層で石を掘り当てて、あら、石!となるだろうか。経過した時間は化石と同等だろう。あら、石!と興奮できる心持ちでありたい。

11. 稗田 一穂 (HIEDA Kazuho / 1920-)



う か
羽化
1959(昭和34)
顔料、紙 155.3×112.3×cm
作者寄贈

私の育ちは田舎であり、夜に駅など行くと両手の大きさ程の蛾とよく遭遇した。それが飛ぶ。あっちにこっちに見当つかない動きで飛ぶ。何を考えておるんだと、今なお思う。

12. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



ふだんらっけい
普段落景
2019(令和元)
油彩、キャンバス 105.0×120.0cm
個人蔵

最寄りのコンビニで用を済ませ、表に出ると広がる光景。何度見たか。たまには腰を下ろし、垣根に分け入っても良いだろう。そこにはその普段がある。

13. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



にちようもん
日用紋
2018(平成30)
油彩、キャンバス 45.0×38.0cm
個人蔵

ああ、上に行きたいと思えばボタンを押そうとすると、その周りにひしめく紋。見渡せばそこいら紋まみれ。あまりに馴染んでいる。誰の仕業か。

14. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



かくじょう
角情
2018(平成30)
油彩、キャンバス 31.0×25.0cm
個人蔵

ある部屋の片隅に、何年放置されたか分からない程の角材を見つける。角材に年輪が見える。製材され角材となるまでにどれ程の年月を経たのか。情が湧く。

15. 熊倉 順吉 (KUMAKURA Junkichi / 1920-1985)



ひ よくぼう
秘められた欲望
1972(昭和47)
陶 54.7×34.0×16.5cm

いつか確実に見たことのある様な形だが、全く親近感が湧かない。八百屋とか魚屋の看板としてこれが置かれていたならば、私はそこで買わない。

2 傍ら かたわら

人と話したり、接する時の距離を指します。
身の周りの物事を認識する態度です。

16. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



もんどろ
問答のよりどころ

2020(令和2)
油彩、キャンバス 73.0×61.0cm
個人蔵

月や太陽はなぜ丸いのか。私が住むここも丸いらしい。夕方、友人の頭に円形脱毛を見つける。抱いていた疑問が一瞬、腑に落ちた気がするが、やはり何一つ解決していない。

17. 保田 龍門 (YASUDA Ryumon / 1891-1965)



じがそう
自画像

1915(大正4)
油彩、キャンバス 60.9×50.2cm

遠巻きにして見ると、新巻の髪型に見えたが、どうやら背景に山がある様である。なるほど山を背景に写真でも撮れば、この髪型に近づける。

18. 横尾 忠則 (YOKOO Tadanori / 1936-)



うみ おとこ
海の男

1969(昭和44)
シルクスクリーン、アクリル、紙 90.3×90.2cm

対象の人物を形容しようとし、この様に頭という大きな特徴を削がれている場合は背景から汲み取れば良いのか。そうなる、現在私は、棚の男である。

19. 今村 源 (IMAMURA Hajime / 1957-)



ねがしだ
1994-2 ネガシダ

1994(平成6)
ステンレススチール、和紙、塗料
144.0×105.0cm 田中恒子氏寄贈

大きいと思うが、それほど違和感無く、状況を心地よくのみこめる。本来とは何か。私ももっと大きい方が良いのか。あなたの大きい姿を見てみたい。

20. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



かげひた
影漬し

2018(平成30)
油彩、キャンバス 72.0×60.0cm
個人蔵

箱の中は、おおよそ影で満たされている。そこに物を入れると、影漬しの出来上がりである。

21. 森野 泰明 (MORINO Hiroaki / 1934-)



わーく
WORK 61-1

1961(昭和36)
陶、銅板、木 103.0×44.0×14.3cm
作者寄贈

何なんだろう。得体が知れない。しかし、身近な所で私の内側も得体が知れない。そう思うと、これも意外と身近なものかも知れない。

22. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



びちくあそ
備蓄遊び

2020(令和2)
油彩、キャンバス 25.0×20.0cm
個人蔵

髪とは思えぬ程のポリウムを湛えたヘアスタイルを目撃した。蓄えあってこそである。

23. 裕 伊之助 (HAZAMA Inosuke / 1895-1977)



すいさかでごすうわえおおざら しんりよく なか
吸坂手呉須上絵大皿「新緑の中のひと」

1972(昭和47)
磁 7.5×45.5×45.5cm
作者寄贈

大皿である。さて私は何を盛ろうか。パンケーキ、揚げそば、トンテキ。ここは一つ白米を平らに敷き詰めたい。食べ進めると次第に覗く、白米に埋もれた顔はきっと趣深い。

24. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



まえむ まいご
前向き迷子

2019(令和元)
油彩、キャンパス 38.0×45.0cm
個人蔵

四天王寺骨董市に通いだして十年以上となるが、その間に外国人観光客が増えた。彼らはふらふらと迷子の様だが、生き生きとしている。

25. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)

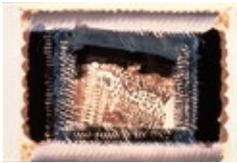


もっこう
黙光

2018(平成30)
油彩、キャンパス 72.0×60.0cm
個人蔵

あまりに悲惨な連絡でも届いたのか。予期せぬ明かりが、この表情を見てくれ、と言わんばかりに照らしている。

26. ホジキン, ハワード (HODGKIN, Howard / 1932-2017)



ひと かた
一つ片づき

1982(昭和57)
リトグラフ、グワッシュ、紙
91.8×122.3cm

何が描かれているのか皆目見当がつかない。この様に感じたならば、焦らず、近くの人に尋ねてみよう。きっと共感してくれるはずです。

27. 三島 喜美代 (MISHIMA Kimiyo / 1932-)



ぼっけーじ
パッケージ

1974(昭和49)
シルクスクリーン、陶 14.0×35.0×27.0cm

何が入っているのでしょうか。の出題に対して、開ける事のできないこの物は意地悪である。これをそっと新聞紙で包み、出題から回答に置き換えたい。

28. 野長瀬 晩花 (NONAGASE Banka / 1889-1964)

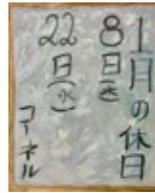


いっさいせき しきくしゅう
『一茶遺跡と四季句集』13

1942(昭和17)頃
顔料、紙 24.0×33.4cm

立て看板が描かれ、文字も書かれている。この立て看板は描きやすい。書き留めたメモや、あの人へ送る恋文など、今一度立て看板を描き、囲ってみてはいかがか。

29. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



ただなか
只中のしらしめ

2020(令和2)
油彩、キャンパス 31.0×25.0cm
個人蔵

行きつけの喫茶店ではこの様に毎月の休日を紙に記し、壁に貼っている。見るたびに筆致が気になる。思い立って筆致を描く。

3 案件 あんけん

自身が他の物事と積極的に接触を図る距離を指します。対象の物事から少し距離をとり、全体を観察し、理解しようとする態度です。

30. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)

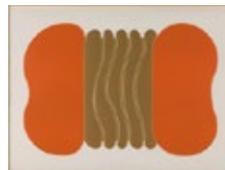


みぎ にし
右から西へ

2018(平成30)
油彩、キャンパス 90.0×70.0cm
個人蔵

箱の中身を違う箱へと移す時、同じく中身の意味合いも変容している様に感じる。

31. 高橋 秀 (TAKAHASHI Shu / 1930-)



はんがしゅう さくひん きんようび
版画集『8つの作品』8 金曜日

1973(昭和48)
石版、シルクスクリーン、空押し、紙
56.0×75.7cm

絞られているのか、蛇腹なのか、接合されているのか。何にせよ、今おかれている形が全てでは無い様な気がする。思い過ぎしかも知れない。

32. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



めんせき

面積おこし

2016(平成28)
油彩、木製パネルに紙 145.0×110.0cm
個人蔵

普段何度も歩いている道を、改めて何度も見直しながら歩くと、どこを歩いているのか分からなくなる。

33. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



しらば

白化っくれ

2018(平成30)
油彩、キャンパス 97.0×130.0cm
個人蔵

人が大きな紙を広げている所である。思った様に上手くいかず、なんども繰り返す度に紙の柔軟さが失われ、予期せぬ大層な形のまま留まりだした。

34. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



な いた

成り板

2018(平成30)
油彩、キャンパス 100.0×78.0cm
個人蔵

この板は昔、ここにある事で何かしらの役割を果たしていたのだろう。今や揺るだけで崩れそうな状態だが、きっと昔より立派である。

35. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



おうせ

凹世

2018(平成30)
油彩、キャンパス 130.0×162.0cm
個人蔵

水面に映るこの世。凹みと水さえあれば簡易に出来る。面倒臭がらずにこの世を見よう。

36. 林 秀行 (HAYASHI Hideyuki / 1937-)



びようたいそう

美容体操

1973(昭和48)
磁 31.0×20.5×11.9cm

柔軟で、かつ反発力のあるものを、一定の形に留めておく事は容易では無い。私の不得意とする事である。結局それが出来ずに八つ当たりし、後悔する。

37. 元永 定正 (MOTONAGA Sadamasa / 1922-2011)



むだい

無題

1972(昭和47)
アクリル絵具、キャンパス
130.5×162.5×3.0cm

何かを限界まで捻ったり、引っ張ったり、膨らませたりして現れる表面の艶は、その一時だけの艶の様で、見逃せない。

38. 土谷 武 (TSUCHITANI Takeshi / 1926-2004)



きゅうかく

178の嗅覚a

1976(昭和51)
鉄 30.5×82.5×12.2cm

低位置に四足。わんこか、椅子か。何はともあれ、腰を掛ける事にそぐわない様な気がする。綺麗に畳んだ衣類などは、置いても叱られないか。

39. 米良 道博 (MERA Dohaku / 1903-1983)



しょうねんぞう

少年像

1941(昭和16)頃
油彩、キャンパス 116.6×91.0cm
米良道光氏寄贈

幼い頃、私もちょっと高い所へ腰を掛けたくなったものである。結局転倒して、怪我をする羽目になる。経験から私は彼に、やめておけと言いたい。

40. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



いしが

石代わり

2018(平成30)
油彩、キャンパス 72.0×60.0cm
個人蔵

ここから先は行くな。は昔、石などが担っていた。今は人も行かう。その人の様子を伺う。あわよくば、先に進もう。

41. 木下 義謙 (KINOSHITA Yoshinori / 1898-1996)



あかでみー おとこ

アカデミー(男)

1930(昭和5)
油彩、キャンパス 46.0×38.4cm
作者寄贈

先日、銭湯に行きまして、風呂から上がり、椅子に腰掛け、コーヒ牛乳を一杯やりつつ、何気なく向けた眼差しの先に、私はこの男を見た。

42. 稗田 一穂 (HIEDA Kazuho / 1920-)

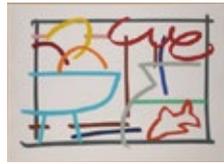


なつさ したず
夏去る 下図

1980(昭和55)
鉛筆、コンテ、紙 185.0x169.8cm
作者寄贈

下図とあるが、十分成された様な印象を受ける。自身も何かを成そうと躍起になる事があるが、他者から見るともう十分と思われているかも知れない。

43. ウェッセルマン, トム (WESSELMANN, Tom / 1931-2004)



くだもの きんぎょばち
果物と金魚鉢のある
静物のはしりがき

1989(平成元)
シルクスクリーン、紙 144.2x199.5cm

プラモデルなどの部品は枠の中に一つずつ接合して取められ、箱には作り出す対象が描かれていて、それを念頭に部品を見ると、大体分かる。この絵も明確なタイトルを念頭に見ると、大体分かる。

4 案外 あんがい

対象を含め、その周りの状況も把握できる距離を指します。突如与えられた状況から、自身が抱いてきた物事に対しての認識を再考する態度です。

44. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



かいめん
界面のしらべ

2019(令和元)
油彩、キャンバス 194.0x130.3cm
個人蔵

磨かれていないガラスが、光を鈍く反射したり、向こう側を、中途半端に見せつける。あちら、こちらの狭間での出来事。

47. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



どがいし
度外視

2019(令和元)
油彩、キャンバス 90.0x70.0cm
個人蔵

私はあなた方を見ているが、あなた方は私を見ず、各々どこかを向いている。あなた方が、私を見つめ始めたなら、私は目を背けるだろう。

45. ホックニー, デヴィッド (HOCKNEY, David / 1937-)



ぐれごりー いめーじ
グレゴリーのイメージ

1985(昭和60)
石版、コラージュ、紙
222.3x104.1cm

周りの人達から、落ち着いて下さい、とよく求められるが、本人は至って落ち着いている。彼もその様な経験を持ち合わせているのではないか。

48. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



ぼけもん
化門

2018(平成30)
油彩、キャンバス 130.0x162.0cm
個人蔵

ガラスを入れ替えたばかりの扉。養生シートやマスキングテープが何かを形容しているかの様である。肝が冷える。

46. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



ぬ う くるま
抜き打ち車

2020(令和2)
油彩、キャンバス 145.0x96.0cm
個人蔵

角を曲がれば、突如台車。誰かが今、仕事で使っているのだろう。これまでに様々な人の仕事を支えてきた台車。そう思っても、あまり尊さを感じない。

49. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



いっこく しゅやく
一刻の主役

2017(平成29)
油彩、キャンバス 97.0x130.0cm
個人蔵

私はこの家の主人であるが、畳んだ布団が、主人より威勢が良いという事は、考えものである。

50. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



みっかまえ
三日前
2017(平成29)
油彩、キャンバス 90.0×70.0cm
個人蔵

近所にある植木。確か六月の場面である。毎日続く曇り空と、変化が見受けられない植木。三日前と何一つ変わらない状況をその日、体感していた。

54. 野長瀬 晩花 (NONAGASE Banka / 1889-1964)



かど
門づけ
1916(大正5)
顔料、紙 131.4×30.2cm

歩く人を見るが、同時に服が動いている事に気づく。今日はこれと決めた、あらゆる柄がそこら中、ゆらゆらと目の前を通りすぎる。

51. 石垣 栄太郎 (ISHIGAKI Eitaro / 1893-1958)



きゅーばとう はんらん
キューバ島の反乱
1933(昭和8)
油彩、キャンバス 181.5×139.0cm
石垣綾子氏寄贈

これはもう大変な事態であり、私はひたすら慌てて、何も無いのにつまずいて、荒野において、信頼していた二人が大喧嘩で、私はあらゆる事を観念するだろう。

55. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



よこふぜい
横風情
2020(令和2)
油彩、キャンバス 70.0×110.0cm
個人蔵

公園で人が横たわり、日に当たっている。人の横たわる姿からは、あらゆる事を想起する。裸の横たわりは、なお深刻な状況を想起する。

52. 建畠 覚造 (TATEHATA Kakuzo / 1919-2006)



ちそう さくひん
地層(作品Aの23)
1951(昭和26)
ポリエステル 130.0×90.0×70.0cm
作者寄贈

よく散歩で訪れる池がある。その側のベンチに毎度座っているご老人は、この様な風体です。

56. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



らっきー ま
ラッキー待ち
2019(令和元)
油彩、キャンバス 30.0×20.0cm
個人蔵

ただ運に任せて来客を祈るのみ。当然、客は来ない。いらいらしている。出で立ちのみ格好良い。

53. 亀井 玄兵衛 (KAMEI Genbei / 1901-1977)



きつつき
1973(昭和48)
顔料、紙 72.6×121.0cm
亀井寛子氏寄贈

きつつきを見た事はあるが、真横からの視点で見た事はない。作者は木に登っている所できつつきと遭遇したのか、それとも伐採した低い木を立てていたなら、きつつきがやって来たのか。私は前者でも後者でもないと思う。

57. 石垣 栄太郎 (ISHIGAKI Eitaro / 1893-1958)



けんとう
拳闘
1925(大正14)
油彩、キャンバス 75.4×91.2cm

日々暮らしにおいてやるか、やらぬかの狭間に立たされる。やれたと思っても、全く成し遂げていない時もあるだろうし、知らぬ間に成し遂げてしまっている時もあるだろう。月に一度、私もレフェリーが欲しい。

5 他人事 ひとつごと

物事を俯瞰する距離を指します。

物事と物事がかち合った状況を、影響が与えられない位置から見つめる態度です。

58. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



とっかんふぜい
突貫風情

2018(平成30)
油彩、キャンパス 102.0×130.0cm
個人蔵

水を流す人がいなければ、ホースに任せ、暑ければ、パラソルを開き、何となく思いつく流しそうめんに近づけていく。それで良いと思う。

59. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



よ ぐわはつづくらい
寄ってたかって偶発寓意

2018(平成30)
油彩、キャンパス 162.0×194.0cm
個人蔵

ある現場である。絵の梱包をしている最中であるが、私は手伝うことを忘れ、手前の人とその位置からの的に向かって飛び跳ねる競技の様だと眺めていた。

60. ノグチ, イサム (NOGUCHI, Isamu / 1904-1988)



かんが ぎちょう
考える議長

1978(昭和53)
御影石、木 作品27.5×23.5×30.0cm/
台座104.5×46.8×26.4cm

そこらの石を適当に拾い、断面を見てみたいと願うが、恐らくこの石は大岩の一部であり、元はその断面が露呈した姿であった。と思いついた途端、石を投げる。

61. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



むきょうみほんい
無興味本位

2018(平成30)
油彩、キャンパス 145.0×110.0cm
個人蔵

興味なく眺めているが、私は脚立に乗った事もあるし、黒い服も持っている。靴を正しく履かずに表に出る事もある。自身に近い物事程、興味が湧かないという事なのか。

62. 高井 貞二 (TAKAI Teiji / 1911-1986)



ぜぶら
ゼブラ

1966(昭和41)
油彩、キャンパス 127.8×127.4cm
作者寄贈

点が三つで人の顔と思ひ込んでしまいますよ。と、何時そやの誰ぞに叩き込まれた記憶があるが、その点、この絵は明らかにシマウマである。

63. 玉置 正敏 (TAMAKI Masatoshi / 1923-2001)



こうずい おとこ
洪水と男

1968(昭和43)
油彩、キャンパス 162.0×391.5cm
作者寄贈

水中では自由がきかない。そもそも水中の外では自由なのか。限りがあるから自由を感じるのか。もう一度水中に入り考える。

64. 建畠 大夢 (TATEHATA Taimu / 1880-1942)



わか ひ きたむらせいぼう
若き日の北村西望

1911(明治44)頃/ 鑄造年不明
ブロンズ 19.0×8.0×7.0cm
北村西望氏寄贈

これほど小さな成人は恐らくこの世に見当たらない。これほど小さな成人の握った感覚を得たいならば、もってこいである。

65. ヴァン・ドンゲン, キース (VAN DONGEN, Kees / 1877-1968)



くろ ふく ぶじん
黒い服の婦人

1910年代[推定]
油彩、キャンパス 144.5×113.0cm
森林平氏寄贈

誰かを待っているのか、どこかを痛めているのか、それとも眠いのか。全てかも知れないし、いずれでも無いかも知れない。無愛想は可能性に富む。

66. 山本 容子 (YAMAMOTO Yoko / 1952-)



ざ みゆーじあむ
The Museum

1978(昭和53)
銅版、紙 45.4×59.8cm
ブリッジ寄贈

そこから、ここまで来て下さいと言われて、では、ここからここまで行きます。というやり取りにいつも一瞬戸惑う。

71. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



せいけい ひょうひ
生計の表皮

2018(平成30)
油彩、キャンバス 90.0×70.0cm
個人蔵

家を見ると、へっこんだり、せり出したり、継ぎ足したり削ったり。私が見ている家とは、内部で求められる空間の外側、それが一つとなったものの表面である。

67. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



ひるすみ
昼隅

2020(令和2)
油彩、キャンバス 25.0×20.0cm
個人蔵

昼、街の片隅。私はここに用は無いな、と思った。そう思った時点でこの場所に捕らえられている。

72. 野長瀬 晩花 (NONAGASE Banka / 1889-1964)



ろぼうあおもものいち
路傍青物市

1932(昭和7)頃
顔料、紙 27.2×48.2×cm
野長瀬婉子氏寄贈

労働に勤しむ人が好きである。ある時は、一体感を得るため同じ柄の服を着たりする。しかし皆同じ様に見えるが、昨晚の献立は各々違う。この事実が心が躍る。昨晚の献立を尋ねる。煙たがられる。

68. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



は きよせい
晴れて虚勢

2019(令和元)
油彩、キャンバス 110.5×70.0cm
個人蔵

晴れて光が強くなる程、影がどんどん暗くなる。影の親よりも、存在感を増していく。

73. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



むりよう せいおん
無料の静穏

2017(平成29)
油彩、キャンバス 78.0×100.0cm
個人蔵

歩き疲れて、ふと脇を見ると、ありがたい、染み入る静穏。癒される。料金は取られない。

69. 福岡 道雄 (FUKUOKA Michio / 1936-)



とり
鳥になれるか2

1990(平成2)
ブロンズ 90.5×61.2×14.5cm

街で突如仕切りが現れたなら、私は見て見ぬ振りで通り過ぎ、いずれその事を忘れる。しかし誰かの仕切りである事には変わりなく、誰かのここまでと、ここからである。

74. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



へいじつ
むくろにも平日

2018(平成30)
油彩、キャンバス 110.0×145.0cm
個人蔵

台風の暴風により倒れた木。この木はもう育たないが、私にはまた明日、平日がやって来る。やがて来る私の平日の内に、この倒木はまだある。

70. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



ひ じきよく
秘めやか時局

2020(令和2)
油彩、キャンバス 107.0×143.0cm
個人蔵

ある商店のひさしだが、よく見ると光やら影、汚れに艶。気づかれず、秘めやかに様相が変わっていく。

6 呆然 ぼうぜん

とても遠くであったり、状況が把握できない距離を指します。遠さや大きさ、理解を超えた状況に対し、恐怖や恍惚を抱く態度です。

75. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



ほし うえ じっか
星の上の実家

2016(平成28)
油彩、木製パネルに紙 110.0×120.5cm
個人蔵

実家を描いた。描いて思うのだが、変哲もない家である。見渡せば、変哲もない、暮らしが宿る家まみれである。誰かの実家まみれである。

79. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



いちぼう けんちょ
一望で顕著まみれ

2020(令和2)
油彩、キャンバス 67.0×60.0cm
個人蔵

求める対象から視線を外し、その位置から十歩程後ろに下がり改めて見渡すと、あらゆる物事が、各々の持ち場で役割を果たしている事に気づく。

76. 高井 貞二 (TAKAI Teiji / 1911-1986)



けむり
煙

1933(昭和8)
油彩、キャンバス 91.1×117.0cm
高井志づ氏寄贈

消えゆく煙や雲が何かに見えると言うが、その何かも、雲や煙とさほど差はない。

80. 白髪 一雄 (SHIRAGA Kazuo / 1924-2008)



さくひん
作品

1972(昭和47)
油彩、キャンバス 130.4×162.5cm
鈴木直弥氏寄贈

ぶちまけて、伸ばしてみたい。と日頃においても、しばしば思う。この絵がある事で、また今日もやり通すことができる。

77. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



へいわ
平和

2020(令和2)
油彩、キャンバス 162.0×194.0cm
個人蔵

角ばったり、膨らんだり、段差があって、笑顔もある。しゃがんで走ってふらついて、安寧。

81. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



ここんたいとうまさつ
古今台頭摩擦

2019(令和元)
油彩、キャンバス 259.0×194.0cm
個人蔵

はるか昔に生きていたとされる者の頭と、今生きている者の頭が鉢合わせ。鉢合わせたとて、何も起きないが、ここに至るまでに様々な事が起こっていた。

78. 山田 光 (YAMADA Hikaru / 1924-2001)



とうへんまんだら
陶片曼荼羅

1973(昭和48)頃
陶 51.5×41.5×7.5cm

似た者同士を沢山集める。そこから、そのものの原型を探るが見当たらない。想像はつくが、実体として無い。例え理想の原型を作り出したとしても、似た者同士の中に放り込めば、たちまちその中の一つとなる。

82. 高井 貞二 (TAKAI Teiji / 1911-1986)



ちず
地図

1934(昭和9)頃
油彩、キャンバス 131.0×162.6cm
作者寄贈

日本列島は地図で見た。その列島があるこの地球は回っているらしい。いずれも、いつか実感する時が来るのだろうか。

83. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



みちづく
道作り
2016(平成28)
油彩、木製パネルに紙 130.0×162.0cm
個人蔵

この男たちは、火や器具を操り、道を作ってしまう。私には作れない。せいぜい作れて炒飯である。

84. ローゼンクイスト, ジェームズ
(ROSENQUIST, James / 1933-2017)



すぺーす だすと
スペース・ダスト
1989(平成元)
リトグラフ、コラージュ、紙 169.0×267.5cm

現実において燃えているものは見定めることができるが、火は見定めることが出来ない。

85. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



むえん
無縁はおあいこ
2019(令和元)
油彩、キャンバス 127.0×145.0cm
個人蔵

鳥が舞い、人が怯えその先に喫茶店。この光景を一挙に捉えてはいるが、私にとってこれらとは無縁であった。描く事で縁を結んだ。

86. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



ゆうえん しょざい みじん うつわ
とどく悠遠の所在、ゆるる微塵の器
2017(平成29)
油彩、キャンバス 194.0×162.0cm
個人蔵

一体どれ程の距離があるかも分からない所から、私にめがけて光が届く。それも数多に。一点に受け止める器量が、私にはあるのか。

87. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



ことば かって おうせい
言葉なく勝手に旺盛
2017(平成29)
油彩、キャンバス 97.0×130.0cm
個人蔵

海へ向かう道中、両側の視界を遮る垣根が終わった途端に広がる光景。多種多様の草木が育ち始めている。どこから来たのかは、答えてくれない。

88. 笹山 忠保 (SASAYAMA Tadayasu / 1939-)



しほんばしら
四本柱
1986(昭和61)
陶 75.3×46.2×45.4cm
作者寄贈

棒を立てて、上に何かを乗せれば、雨を凌げそうである。ささやかな事から家が始まる。始まってしまえば、その場所から他のあらゆる事が始まり出す。

89. 田中 秀介 (TANAKA Shusuke / 1986-)



さき
ここまでの先
2020(令和2)
油彩、キャンバス 145.0×110.0cm
個人蔵

ここから先は行けない様だが、ここから先にも状況は続いている。ここから先をどうするかは、自身で決めなければならない。

